地域と共に生きる

◎お寺を支える女性パワーの源・同朋婦人会

半世紀のつながりを大切に

能登教区 第10組　西勝寺坊守　西山（にしやま）　益美（ますみ）

前坊守が中心となって始まった西勝寺同朋婦人会。2017年で50周年を迎えることができました。オーソドックスな取り組みではありますが、これまでを振り返りこれからを考えようと思います。

1967年4月に結成した当初、門徒さんも含め会員は160名でした。11町内、各1～2名の役員を立て、会長を坊守が務め、副会長・書記・会計を役員の中から選出してスタートしました。現在は顧問を前坊守が務めており、元気に参加しています。

年間行事として、年に一度の研修会、年2回のお楽しみ会も兼ねた新年会と敬老会、その他に幹事会が5回、役員会が3回あります。うれしいことに2017年5月、会の歩みが「同朋の会結成五十年表彰」という形で本山から表彰していただきました。「ありがたや　同朋会五十年　桜咲く」―仏さまのおはたらきによって、このような長い時間つながってこられましたこと、只々感謝するばかりです。

研修会の内容は、教務所で開かれる学習会に参加したり、本山の報恩講参詣、住職引率ガイドによる寺院巡り、文化財巡りなど様々。節目の年には宿泊を伴う会にして、日常から少し離れ、ゆったりと学習する機会を設け、親睦を深め合います。

また、日々の生活の中で必要な教本や蝋燭消し器などの道具、略肩衣や念珠なども揃えました。本堂の幕や椅子、立焼香机などを必要に応じて寄進してきました。会員ご逝去の際には、弔旗を立て、弔辞を拝読し、香典を出すことができました。このつながりは簡単なようで、かなり大変で面倒なことだと改めて思います。

今、「つながりの再生」と言われます。同朋婦人会が実のあるものへ発展するよう願いますが、全く不安がないとは言えません。160名だった会員が、現在は約80名。過疎化・少子化は避けられません。社会の変化とともに、会員の思いにも変化があるでしょう。「つながりの再生」、言い換えれば「面倒くさい」を引き受ける力を失わないということだと知りました。

首都圏広報誌『Sein vol.5』の中に「絆（きずな）という字には、傷（きず）という言葉が入っている」とあり、「面倒くささとつながりはセットで、どちらかだけを切り捨てるというのはできない」「1人でできることはごく限られている。そういう中で、その面倒くささを引き受けていくしかない。家族でも、地域でも、社会でも同じです。それが人の中で生きるということ」なのでしょう。

たかが50年、されど50年。つながりを求めて、これからも!!